

以下は、サブ顧問（ボランティア部のマネージャーだと思っている）高橋寛が、ボランティア部の震災以降の活動6年間の区切りには、河北新報に寄せた文章です。3月22日の朝刊に掲載予定とのことでした。（4年ほど前にもボランティアについての文章を載せてもらったことがありました。）この6年間の歩みを部員の皆さんにも知ってもらいたく、ここに載せることにしました。内容は、ボランティア部で活動した部員たちの3年間の振り返りを元にしていきます。

（2017・3・15覚記）

「高校生ボランティアく震災から学んだこと・継続の意義」

2011年5月、勤務先の高校が再開してすぐ、ボランティアの生徒たちと募金のために街に立った。東日本大震災から2カ月しかたっていない街は興奮気味で、足早に歩く人々であふれていたが、季節とともに少しずつ落ち着いていった。どんな時でも、街は生徒たちに親切だった。

「私たちの募金は、震災で親を亡くした子どもたちのために使ってもらいます」。声をからした訴えに、通る人たちは家族や親族の子に対するように接してくれた。「これをなめながらやりなさい」

とあめ玉をくれたり、ケーキを差し入れてくれたり。あるいは「喪章をしなさい」と叱られたり。厳寒の2月には、温かいお茶を差し入れてくれる人もいた。



あれから6年たった。あつという間のような気もする。今も毎月街に立つ。ボランティア部に入った生徒の必須活動の一つである。50人ほどの部員はそれぞれの班に分かれて、主に三つの活動に交代で全員が参加する。ホームレスへの炊き出しに準備から反省会まで参加する活動と、震災募金（震災によるひとり親家庭支援）活動、仮設住宅から災害公営住宅に移った方たちへの訪問活動である。

触れ合う中で心が育つ。炊き出しボランティアに参加して、生徒は社会と生々しく接触するばかりでなく、協力心や自主性、コミュニケーション力に至るまで学び体験する。またそこでは、自分の利益を考えずに行動している人たちを間近で見る。

募金で街に立つ生徒たちは、お金以上のたくさんものをいただいてくる。お金の集まらない時期があっても、必ず協力してくださる人がいる。それがこの活動を毎月続ける大きな力になっている。額の多少ではなく、震災の記憶を風化させてはならないという思いとともに続けている。

仙台市太白区长町の仮設住宅へ1年間訪問活動を続ける間に、生徒たちはカレーライスとクッキー作りが得意になった。また、それを心待ちにしていた。昨年暮れには青葉区北仙台の災害公営住宅でクリスマス会をした。ハンドベル演奏なども入れて、大変喜んでいただいた。94歳の男性からは「生まれて初めて盛大な会に招待されて、楽しい半日を過ごすことができました」という感想までいただいた。



生徒たちはこれらの活動の中で、自分の課題に嫌でも向き合うようになる。人見知り、口べた、協調心のなさ、そっかしさなど…。自分が参加した数の分だけ、感じ方、考え方の違うたくさんの人と出会い、人の温かさや優しさにじかに触れて、それが自分の宝物となる。そして、いつの間にか自分が成長し、あるいは進歩して課題を乗り越えていることに気付く。この活動に継続して参加することの意義である。

将来、自分がつくり手、担い手として関わっていくであろう街の中へ3年間入り、毎月立ち、その息遣いを吸い取る経験を通して、自分の中につくり上げるものがある。そう信じている。

(投稿)

(注) 文章中に「主に三つの活動に交代で全員が参加する」とあるのは、募金活動は、原則全員毎月の参加。炊き出しボラは、班毎の当番制。復興住宅訪問活動も参加希望制ではなく班毎当番制になります。